ら、迷信などは間奏行動であり、他は伴奏行動にとどまる行動種とみなすことができる。

(三) 学習活動＝革生行動体制

これまで述べてきた行動体制種は、一般にいわれている学習活動の方向にむかおうとするが、なにかの原因でつまずいているときやその体制変換に失敗したときなどに発動する行動であった。

ここでは、(二)の④に述べた中継ぎ過程系が繰り込まれることにより、順応の変換および形成が実現した状態について述べることとする。

① 回帰行動体制

勤めを終えて帰宅すると入浴して、夕食を取り、午後十時をすぎるといつものように床につくといった行動型があろう。ここでの入浴、夕食、就寝といった行動が回帰行動体制である。あ[illegible]

象に内在すると仮定される原理や解法に関して習得したあと、練習問題でドリルをすることが多い。ここでのドリル活動のように、すでに形成されている行動体制と、同じ形式の手続きによって形成された行動体制のもとで成就するにいたった場合、同次行動体制とよぶわけである。

従って、盲聾二重障害児の言語行動の形成に適用した仮設を精神薄弱児や脳性マヒ児の言語行動の形成に適用範囲を拡げて成功するに至った例も同次変換である。ふろしきに物をつつんで結べるようになってから、くつのひもが結べるようになり、エプロンのひもを後ろ手で結べるようになることなども同じである。

③ 高次行動体制*

世にいわれる偉大な発明をあげるまでもなく、庭池で舟を浮かべて遊んで[illegible]、[illegible]止まろうと[illegible]もたキョ[illegible]拾っこうこうどす[illegible]次変り、[illegible]におじめであ[illegible]働に

よりなしとげる行動型と他人の労働によってなしとげる行動型とがある。前者を、工作的行動体制*後者を呪術的行動体制*と呼んで区別することもある。③の項で述べた例は、工作的高次変換にあたる。人をだまして金品を手に入れるいわゆる詐欺やイソップの狼少年の最初の言動などは呪術的高次変換にあたるといえる。

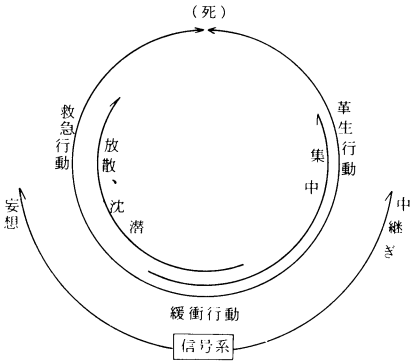
また、調整度の高い、つまり集中性の高い行動種の進行により、文字通りの「寝食を忘れた」研究活動の続行のあげく死に至る場合もありうる。小松左京『日本沈没』における福原教授の死がこれにあたる。

三、終わりに

これまで述べてきたことをまとめると、図1のように表わすことができよう。生きているということは、ある時は集中度の高い方向量の調整による行動種であったり、ある時はよどんで緩衝性の高い行動種の発現、展開であったりなど、放散、沈潜から高い集中性の間をたゆたいつづけることになる。従って、泣くことも、怒りを爆発させることも、時には必要なことであり、だれでも同じ状況で等しい条件におかれると、同じ行動をひき起こす。

教師は、子供のその時々の行動体制の展開が、下図においてどこに位置づけられるものであり、その時どう対処することが生命活動の拡大・充実の方向にむかうことをたすけることになるのかを見てとる目をもたなければならない。つまり、子供が救急行動体制にあるとき、できるだけ早く革生方向への体制づくりを促進させるには、しばらくそっとしておくのがよいのか、外に連れだしてみるのがよいのかなどを判断してすばやく実行に移すわけである。その結果、子供がいっそう激しく泣くことになっても、子供自身には責任はなく、すべての責任は教師が負わなければならない。換言すれば、教師は、子供がどういう経過を経て現在泣いているのかを見きわめなければ、適時、適切、適度な対処のしかたができない。

図1　調整度からみた行動体制の位置づけ



注　*の用語は、梅津八三　一九七六心理学的行動図　重複障害教育研究所研究紀要No.1によった。

補注　前回(七月号)の盲幼児の登校拒否の事例は、譚恵江一九七八「言語行動の最初期状態にある盲児の行動体制次序変換およびそれに対応する信号系活動の促進、形成についての心理学的輔生工作」前掲誌No.3によった。